

私は、ふとこんなことを思います。

「どうして、健常者と障害者で違う生き方をしなくてはならないのだろう。」

私の友達には突発性難聴の子がいます。右耳だけが聞こえません。補聴器をつけていますが、周りに雑音があると、正確に聞き取れません。レストランなどでは、手話で会話をします。私は彼女と同じ立場で会話をしたくて二年ほどかけて手話を覚えました。

ある日、彼女とレストランに行きました。

いつも通り手話で会話をしていました。すると小学生くらいの男の子が声をかけてきました。

「お姉ちゃんたち何してるの。」

と言われました。私は、

「耳が聞こえないから手でお話してるんだよ。」

と答えました。男の子は、

「耳が聞こえないって、大変そうだけど、手でお話ができるんだ。」

と言い、

「『がんばって』って、どうやってやるの。」

と聞いてきました。教えるのと、彼女に向かって手話をしていました。彼女は、

「耳が聞こえないから、いろんな偏見を向けられることもあるけど、ああやって同じ立場で話してくれると、すごくうれしい。」

と笑顔で言っていました。

世界には、耳が聞こえない人を含め、たくさんの障害のある人がいます。みんな生きづらさを感じながらも、毎日を懸命に生きています。障害のある人たちの必死な姿を否定する人もいます。私は、障害のある人たちの生きづらさが、少しでも減って欲しいと思っています。

そこで私は、どうしたら生きやすくなるか考え、行動したことがあります。一つ目は、健常者と同じように接することです。私の友達も気を遣われると逆に悲しくなると言っていました。先程話した男の子のような、まっすぐな思いは障害のある人たちの心にしっかり届きます。二つ目は、困っていたら笑顔で助けることです。嫌だ、面倒くさいという顔で助けるのでは、障害のある人たちは

の抱く気持ちは全く違います。笑顔で助けることで、障害のある人たちはうれしくなると思います。

健常者には健常者のカタチが、障害者には障害者のカタチがあります。また、一人一人自分のカタチがあります。全部のカタチが認められるのは難しいかもしれません。ですが、少しでも多くの人がカタチを認め合うことで、よりよい社会になっただけでいいなと思います。視覚と聴覚に障害のあったヘレン・ケラーはこんな言葉を残しています。「人々の思いやりがあれば、小さな善意を大きな貢献にかえることができます」私はこの言葉にあるように思いやりをもって、人と接していきたいです。よりよい社会にするためにも、たくさんの方のカタチを見つめ、その一つ一つに光、日々を幸せに生きる力を与えられる人になりたいです。多くの人に「苦悩」よりも、「幸福」という光がありますように。